

いかと思う。

渡辺：中国の教育の方法は、予報する者は予報一本、観測するものは観測一本で教えているので、能力が高低は別として、程度としては揃っているといえるだろう。

高橋：このような事態に対して、日本として反省する必要があるのではないか。

根本：解析上の具体的な問題であるが、われわれがいつも困るのは、寒気が南にあり、暖気が北にあるような場合、そこにできた低気圧の frontal system をどうするか。中国ではこんな時どんな風に描いているか。ソヴェートはどうか？

倉嶋：それは front の maskierung の問題だが、ソヴェートでもその問題には注意されていて、正しく解析されている。アメリカでも historical maps で見たがその時の大勢によって正しく描いている。地上で行き詰った時には、上層の形によって地上も描いている。

久米：しかし毎日の天気図ではそれは解らない。historical maps を調べて初めてわかる現象だから。したがってこのように後でわかるものは、これを数多く調べて一つの法則を作り、それによって描いてゆくより仕方がないと思う。換言すれば、われわれは大気の下層の摩擦層の構造を表現する方法をまだもっていない。それと同じような問題で、大陸の高気圧が成分の異なるものから成っている場合、これを分けて考えてゆかなければいけないと思う。

高橋：以上のような新しい問題が判ってきた時に、これを現業に生かして実行してゆこうという努力が、日本では行われなかった。これをどういうように現業に入れてゆけばよいか？

久米：中央の現業の場合、仕事の性質が中断を絶体に許されないために、或る方法が古いと解っていても、これを直すことができない。中央の仕事はこのために本

質的に保守的ということができよう。したがって現状のまま新しい方法を取り入れて進歩させようとする、非常に長い時間がかかる。これをあらためるには、現業と同じような仕事をしていて、直接社会に対しては責任を負わないような平行した組織を造り、ここで新しい方法を test planning として行い、或る程度の見込がついたならば、適当な時期に現業に移してゆくようにすればよいと思う。昔の軍隊ではこの方法でやっていたのだから、気象庁でもこの方法を取り入れればよいのではないか。ただ組織を造るにしてもそれを構成するのは人で、結局は人の問題になるのであるから、この点はよく注意しなければならない。

高橋：中共の資料をみると、予想外に良いのは、やはり以上のような組織の問題が大きな要因であることが痛感される。

田原：日本では、日々の天気図の解析が、これを担当する人によって、流儀が異なるので、これをどう修正してゆくかがわれわれ当番の悩みである。

田辺：中国の気象解析能力をうかがう一端として、中国の梅雨について発表されたあちらの新聞をみると次のようなことがある。今年は雨域も例年の揚子江流域より北の淮河流域に多かったが、その原因としていろいろ挙げてある内に、29年に比較して今年はチベットの上空から出てくる寒気が大部北の方に偏っているというのがある。このような点に注意していることは、著目するに値すると思う。

久米：中国の大雨は、日本の水害の場合と synoptic situation が同じなようだ。高・低気圧の動きは大気大循環の変動として把握され、それは大雨などと関係するわけだが、こういった点が知れるようになったのだけでも、北半球天気図の完成の意義が知れよう。

(未刊)

(文責：天気編集部)

書評

高々度における生体

クセジュ文庫, J.Guillermé: La vie en haute altitude の訳である。訳者は東京医科歯科大学教授北博正氏。内容は大気の物理学、山の植物、山の動物、山地における人間の生理学、航空における生理学的諸問題の5章に分かれている。

戦後実質的に空の独立性を失った今の日本はこの方面の学問は大きな空白時代にあった。最近次第にこの方面の注意がかん起され出してきた。その意味でこの訳書の出版は timely なものである。

どの項も最近の成果まで取り入れて、これが極めて平易に説かているので一般教養書として便利である。山の

植物、動物などが書かれているのは Armstrong や Bauer のようないわゆる航空医学やいわゆる高山医学の成書などに見られぬ特色で、山を愛する人々などは楽しい読物になろう。最後の二章はこの本の本命で、とくにジェット機時代の航空医学の本の特色を表わしている。気密装置、騒音、振動、超音波に対する医学的な考慮などは興味を引く所であろう。

訳註が豊富に入れてあって、とくに巻末の参考文献が更に訳者によってつけ加えられているのは訳者の親切を示すものである。

しかし、4、5章において医学的用語に対する訳註が他の章に比して少なすぎる。一般の読者には難解な点が残るのではなからうか。(神山恵三)